

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十五年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九卷十一号（通卷第三二七号）

鈴



くろっけ

山口誓子先生追悼号

第227号

俳句雑誌

GLOCKE

3. 2013

余生

品川 鈴子

除夜詣で七十代はあと幾歩

新年会ふるさと訛満つロビ―

初飛行ベルトを締める正坐癖

八十歳漆も黄ばむ雑煮椀



怖がらぬ皇居のスワンもやし食ぶ

縫初めはほつれ直しの千鳥栴ひ

縫初めの糸へは紅絹もみの鯛入れ食ひ

福引きは孤老にピンク腕時計

鳩の恋余生ピンクの腕時計

腕時計ピンクの余生たびら雪



玉鈴

吟

愛媛 福田かよ子

雪嶺の稜線光り茜雲
遠き日の火吹竹ありログハウス
中仙道千本格子に寒の菊
柔らかき言の葉に棘冬薔薇
久々に親子の会話根深汁

兵庫 藤井久仁子

この辺で意地張りは止め海鼠囃む
訓練馬の太き白息宙に舞ふ
湖小春赤こんにやくの由来聞く
冬の日や姿を正すショーウインドー
慶事増え懐忙し年の暮

兵庫 藤田かもめ

かはたれの紅葉かつ散る道祖神
小春日や折鶴となる薬包紙
御七夜や大合唱の正信偈
絵馬堂に赤鬼の面煤払ひ
光源はダイオードてふ大聖樹

兵庫 史 あかり

小さきは二個一にして牡蠣フライ
お辞儀して少しふらつく着ぶくれて
寒風や校則守る刈上げに
見学の子は着ぶくれの松葉杖
極月の繁昌亭の三味太鼓

兵庫 古井公代

冬木立筧の音の芯太し
期限切れ玉子を茹でて近松忌
寄鍋に犬派猫派の笑ひ合ひ
鳥籠の隅まで陽射し十二月
柚子大根亡夫が拾ひし石で漬け

大阪 古林田鶴子

秋深し蕎原そふらの里の秘境めく
そつと出す児の宝物新松子
かくれ径紅葉大樹に身も染まる
干支の「巳」の凶柄あれこれ小六月
追ひ付かぬまゝの予定や冬支度

兵庫 細川 知子

炭をつぐ梨園の星を悼みつつ
芝居小屋咳することもはばかられ
年忘れ市長の唄ふピートルズ
おほかたは知つたかぶりの木の葉髪
ねんねこの児も演説を聞いてをり

兵庫 細野 恵久

如月の風竹林を混ぜ返す
草餅や内裏右とか左とか
初燕都会の空のあり余り
分け入ればもはや斑雪と言へずなる
山笑ふ重機の爪に搔かれつつ

愛媛 松井 洋子

寺普請の牛も祀られ薄紅葉
結界地に夫婦貉の洞ひとつ
曲輪めく寺の石垣鷹渡る
手と口は親譲りなり煤払ふ
子犬もらふ話纏まる年の暮

埼玉 松木 清川

搗きし餅赤子抱くかに取り上げる
版画展紅葉且つ散る上野山
枯菊を茹りて菊の香再度嗅ぐ
二ツ宮並ぶ鳥居に注連二本
「鶴亀」は氷川の杜の初謡

東京 松本 アイ

バケツ稲刈られて整列校庭に
忌のはがきポストに一枚十二月
野良焚火珍らし地名の続く旅
山里は勝手気ままなつるし柿
シルバーパスもて街中へ秋惜しむ

愛媛 松本 恒子

足場組む真上に立ちし鷹柱
冬桜異国言葉に道ゆづる
すれ違ふ歩荷ひたすら草紅葉
弁柄の花街抜けて牡蠣雑炊
亡き夫の好み受けつぐ酔海鼠

愛媛 三浦 澄江

眞直に晩年が来て年用意
寒林のふところに日矢射しこめり
庭隅の渾身の赤唐辛子
水琴の一滴一音冬きざす
黄落や旅の漢の黒かばん

兵庫 三枝 邦光

手袋の片手拝みに道祖神
苦小屋の裸電球冬の彩
真つ向に沈む夕日や鴨の湖
極月の空を狭しと鳶の舞
深しんと更けて寒月犬の吠

兵庫 水野 範子

乗馬の子背筋ますぐに春の風
蘭の鉢しまひ忘るも寒に耐へ
雪催ひ芝生の色を変へてゆき
冷ゆる夜の出囃流る城下街
勘三郎永遠に忘れじ師走の訃

兵庫 水野 弘

枕辺の母の遺影に春の風
友笑顔入院棟の春待草
友偲び集う同窓花の散る
小雪舞う友皆逝きて一人旅
涙涙親友召さる寒の空

香川 三橋 早苗

時雨あと千本鳥居薄日射す
器量猫ばかりが肥ゆる冬河原
篆書体冷たき一石に名を刻む
虎・三毛・斑大きく伸びし小六月
ルノアール好みの女冬至の湯

茨城 三輪 慶子

寒の晴ホールインワンの証明書
餅搗きの湯気を横目に句会へと
どの顔も勘三郎似羽子板市
羽子板市羽根のみさげて抜けにけり
市抜けて極月の街雨催

埼玉 向江 醇子

冬帽を乗せてタクシー走り去る
冬の夜を急ぎ来て聴くアヴェマリア
次々に名優逝きし年暮るる
芭蕉忌や気儘な旅もしてみたし
昔日に思ひ巡らす柚子湯かな

兵庫 村田とくみ

直売の大根にも列学園祭
朝毎の寒気問答垣根越し
単線の途中下車二度紅葉狩
黄落の潮汲坂に杖とらる
かぶら干し日溜り追ふて二・三日

佐賀 森田 子月

ジョンレン命日
残されし愛あらばこそまた冬に生く
足冷えか心の冷えかレノンの忌
厚布団この世に何枚足らぬか
湯たんぽを沸かしつつ今日ふつと生き
文机のジョン忌にありて今夜あり

大阪 師岡 洋子

冬雀みくじに百の小抽斗
麦の芽に鉛筆書きのやうな雨
冬桜湖に日の射すひとところ
更けてより変はる風音葛湯吹く
落葉して木椅子ひとつのギタリスト

東京 安田とし子

焼芋に眼鏡くもらす学園祭
噓して罫にはみだす鬱の文字
オーバーの反り身に仰ぐ塔五重
柚子よせて細波たたす湯浴かな
年忘れ「高砂」謡ひ締め括る

愛媛 梁瀬照恵

ゴリゴリと骨の軋みて秋深む
血珊瑚のチューブ差す腕指の冷え
据え膳の否応なしの焦秋刀魚
落葉して遊具に日差し暖かし
児の背なに冬陽の温し砂遊び

香川 横内かよこ

それぞれの物差しがあり冬の月
鴛鴦や実は相手をよく変へて
予後の身は目深に被る冬帽子
極月の手帳売場は目立つ場所
風呂吹や歯の無き祖母の為に炊く

大阪 吉田和子

月影に公園猫の目が八つ
駆けるたび草履のぬげる七五三
嫁の手と孫の足借る味噌作り
猿山にもいぢめられつ子悴みて
動物園かじけ兎は餌を食はず

兵庫 明石文子

冬すみれ未来の夢は極秘とす
難聴の二人の会話冬うらら
雪しまく閑ヶ原へとやみくもに
花咲かす一輪挿しの山茶花よ
初雪や奥の細道結びの地

兵庫 秋田直巳

除夜の鐘聞きつ出発ロシア船
握手して見舞の客となる夜長
短日の患者専用理髪店
冬の夜をまた読み返す俳誌なる
玻璃越しに月影凍つる吾がベッド

愛媛 足利淳子

句作りも一寸幸せ落葉掃く
毗に雨一粒や返り花
庭中に枯葉を散らす昨夜の風
茹であげし冬菜の緑夕餉とす
十年のカルテの重みそぞろ寒む

大阪 尼寄太一郎

臨海校クルスの島の禅寺に
仏桑花挿頭して古希のフラダンス
絵日傘のよちよち歩き母と追ふ
子等下校つつじの蜜を吸ひながら
拭く黴に父の残り香皮草履

鈴の奏

品川鈴子選

金婚の報も訃報も十二月 兵庫 吉田 耕人

酒の粕焙りはらから俵びをり
したたかに生きて河豚肝憚らず

凧ぎわたる渚綾なす初茜

碁盤目の京の賑はひ初時雨 兵庫 中村 紘

遠州の庭の石橋京時雨

冬ざれの道に客待つ人力車

日向ぼこ来週までに解くクイズ

贈られし篝火の襷こまか 兵庫 植田 雅代

小夜時雨月命日の妣話題

大根煮て妣に供えるふた七日

出棺の妣澄む空の碧きへと

数へ日の随道のバス寡黙なり 兵庫 西田 敏之

訃の知らせ声高に問ふ寒夜かな

訃の人とまがふ子の声寒椿

甥姪も老の語らひ通夜時雨

美容院出でて師走の買物に 愛媛 大西ユリ子

影消ゆと主治医の言葉冬うらら

明太子届きぬ孫の初歳暮

新調のスキー靴置く若夫婦

冬晴の富士のあなたに神戸あり 埼玉

マスク取つて聞かせよきみの神戸弁 松岡悠喜夫

「G線」の神戸サブレを聖菓とす

冬至湯にスウェーデンの友想ひけり

捨てきれぬ亡夫の匂ひ冬帽子 山口 山本 敏子

医院への迎へを待てり厚着して

外食に友はいつでも牡蠣フライ

亡夫恋ふちよこ一杯の熱燗に

五箇荘かぶ盛り上がるかくれ里 兵庫 木本 修

冬空のきぬがさ山の道礼所

東大寺団栗も食む鹿の群れ

時雨どき鐘楼のなか俊乗堂

跳炭の動く小袖に焦げ匂ふ 兵庫 坊野貴代美

夜咄に手燭の尼僧迎へたる

河豚汁のれんげを休め声弾む

寒冷に列車の扉長く開き

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 〱十五句 島内 美佳 〱

*選句は全て 品川鈴子

金婚の報も訃報も十二月

吉田 耕人

十二月ともなると年内に起こった悲喜こもごもの知らせが届くので、郵便受けを覗くのもためらいがち。受取人の齢に相応して、金婚祝が稀にはあるが、やはり思いがけない訃報が多くて、日々動揺するばかり。

日向ぼこ来週までに解くクイズ

中村 紘

日向でのんびり過ごすのが一昔前の日向ぼっこ、だがIT時代の進化につれて、クイズも高度な知能遊びとして盛んになり、締切りに追われる。通勤の電車内でもしずかに風景を眺めているのは、俳句を捻ってる私だけ？

大根煮て妣に供えるふた七日

植田 雅代

亡くなった母親はまだ世を去って双七日しか経たず、集

まって法要する同胞の傍に留まっているだろう。だから好きだった大根を軟らかく煮含めて、家庭的な味と匂いの漂う供物です。

甥姪も老の語らひ通夜時雨る

西田 敏之

通夜の席で故人を偲び乍ら、静かに思い出話をしている。甥姪は作者にとつてはまだまだ若いと思える年頃。その甥姪も老について語り合っている。涙雨か、辺りがしぐれて来た。寂寞の感を禁じ得ない心が伝わって来る。

美容院出でて師走の買物に

大西ユリ子

行き付けの美容院で楽しいお喋りをし乍ら、美しく仕上がった髪を師走の風に靡かせて、さあ次はお買物。初歳暮を贈って呉れた孫には何をプレゼントしよう。それから新年の準備の品々。お洒落で若々しい作者はご自分の為に何を買われるのだろうか。楽しさが一杯伝わって来る佳句。

「G線」の神戸サブレを聖菓とす

松岡悠喜夫

「G線」は神戸布引にある昭和二十七年創業の、コーヒークーキのお店。三宮と布引にあった店舗は震災で倒壊してしまっただが、二年後布引に再建した。「G線」はバツハのG線上のアリアからとった名前。保存料無添加天然素材にこだわり続けた伝統の味。神戸サブレは、神戸の表情風見鶏、いかり、異人館、船を型どったお洒落なサブレ。この神戸サブレを聖菓としてクリスマスを祝った。作者は神戸への強い思い入れがおりなので、と思った。大好きな句です。

外食に友はいつでも牡蠣フライ

山本 敏子

気のおけない親友と連れ立って遊びに出掛け、外食を楽しんでる。一応メニューに目を通すが、友はお気に入り牡蠣フライに決まっている。お住まいから想像すると広島産の鮮度の良い美味しい牡蠣でしょうか。食いしん坊の私は、作者は何を注文されたのか、ちょっと気になります。

東大寺団栗も食む鹿の群れ

木木 彦

東大寺の鹿は宮島の鹿と違って躰が行き届いている。鹿せんべいも客がお金を払うのを待って寄って来ると言う。客が良かったのか、自然に落ちていたのか、鹿の群れが団栗を食べていた。私もポリポリと片を立てて食べるのを見たことがある。鹿せんべいより遠慮なく食べられるのかも。

河豚汁のれんげを休め声弾む

坊野貴代美

河豚汁は高級料理。鍋を囲み黙々と食べていたが、お喋りの方がお留守になつていた。ちよつとれんげを休ませて、話の花を咲かせましょう。会えばあの話この話、話したいこと一杯あるでしょう。

時雨るるや子の負け試合親の黙

猿橋二三雄

子の負け試合。雨の中何の試合だったのだろうか。団体競技、個人競技。いずれにしても悔しさはおさまらない。ここは静かに見守ってやるしかない。意外と子の方が早く立ち直っているかも知れない。(以下略)